

人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

人間性豊かに生きる—「人間性」を求める—

8

令和5年 No.1338



■県立山口博物館の取組

山口県立山口博物館

館長 西村 和彦

■博物館での研修を生かす

山口県立防府総合支援学校

中学部 教諭 惣田 亘代

■新しく開く・再び開く

周防大島町立東和小学校

校長 笠口由美子

柳井市立平郡東小学校

校長 下瀬 正文

蓋井小中学校 下関市立蓋井小学校（下関市立蓋井中学校）

校長 藤井 潔

■地域と連携した教育活動

周南市教育委員会

指導主事 濱崎 康弘

美祢市立伊佐中学校

教諭 丸谷 友克

■コミュニティセンター・公民館の取組（公民館報表彰館）

光市立室積コミュニティセンター

館長 松本 隆

（室積まちぐるみ協議会 会長）

館長 中原 純二

長門市俵山公民館

令和4年度 第75回山口県学校美術展 推奨作品

「蛇口」

宇部市立厚南中学校 1年（受賞時） 谷田 葵乙

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：重枝謙二



あなたの
アクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

◎あいさつ返事で明るいやまぐち

◎笑顔でつなぐ安心やまぐち

◎ゴミ落書きのない美しいやまぐち

県立山口博物館の取組

ようこそ「やまばくへ！

山口博物館の取組

山口県立山口博物館

館長
西村和彥



はじめに

当館は明治45年に防長教育博物館として発足し、大正6年に山口県立教育博物館として県に移管されました。昭和42年には本館棟が改築され、現在に至っています。県立の博物館としては全国で最も長い歴史を誇り、天文、地学、植物、動物、考古、歴史、理工の7分野を有する総合博物館です。

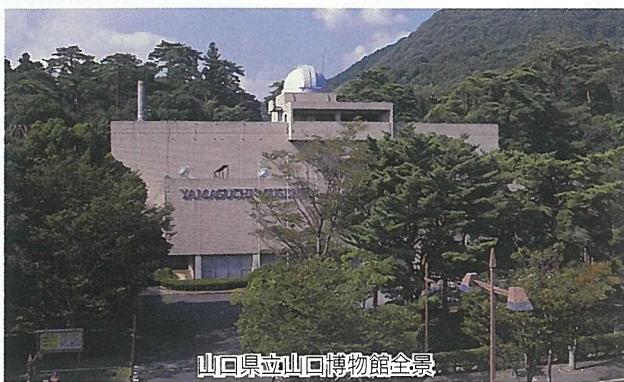
が、歴史展示室の一部を「デジタル松下村塾」として改裝するなど、最新のデジタル技術を活用した展示にも取り組んでいます。

常設展示・施設の概要

2階の入口から館内に入ると理工展示室があり、ここには県内企業の卓越したものづくりの技術を「おも

化石や岩石、そして山口線を走っていた蒸気機関車を展示しています。

館内や学校・地域での活動



様の学習ニーズが高度化・多様化する中、当館では7分野各1人の学芸員により、一般県民の方々を対象とした天体観望会、地学教室、昆虫観察、歴史探察、植物教室、会員による展示会など、多岐にわたる活動を行なっています。

訪・勾玉づくり・科学工作講座等を、1年間を通じて開設しています。また、博物館と学校・地域を結ぶ取組として、3人の長期研修教員を中心に、児童生徒の社会見学の受入れや、小・中学校・地域等での出前授業をオンラインも活用しながら実施しています。

自然や科学に関する児童生徒の研究成果を顕彰する取組として、県と県教育委員会が主催する「サイエンスやまぐち2023」の科学作品展と科学研究発表会を、在に動かせる『オムクロタイヤ』が「第81回全日本学生児童発明くふう展」において恩賜記念賞（全国第1位）を受賞するという素晴らしい結果を残しました。

企画展・特別展

当館では、年間2回の企画展を、夏には特別展を開催し、常設展示とあわせて来館者の皆様に楽しんでいただいています。今年度の企画展は、春に、実験や観察をとおして楽しく音の正体に迫る「音ってなあに?」を開催し、11月末からは、中世大名大内氏文書の粹を展示する「手鑑『多々良の麻佐古』」の開催を予定しています。現在は、特別展「やまぐち大考古博—みよう、ふれよう、やまぐちの30000年—」を開催中です。本県には、弥生時代以来の半島との交流、古墳時代のヤマト王権との強い結びつき、古代の貨幣「和同開珎」の鋳造に代表される最先端産業の発展、中世における畿内・西国の霸者大内氏の華麗な文化など豊かな歴史が数多く残されています。本特別展では半世紀にわたる県内の発掘成果を紹介し、交流・産業・政治の視点から本県の魅力を県内外に広く発信したいと考えています。

以上、当館の主な取組を紹介しました。こうした取組は、天文、植物、動物、理工等の分野でご協力いただいているサポートナーの方々をはじめ、当館を応援してくださっている数多くの県民の皆様に支えられています。

当館では、年間2回の企画展を夏には特別展を開催し、常設展示とあわせて来館者の皆様に楽しんでいただいています。今年度の企画展は、春に実験や観察をおして楽しく音の正体に迫る「音ってなあに?」を開催し、11月末からは、中世大名大内氏文書の粹を展示する「手鑑『多々良の麻佐古』」の開催を予定しています。現在は、特別展「やまぐち大考古博—みよう、ふれよう、やまぐちの3000年—」を開催中です。本県には、弥生時代以来の半島との交流、古墳時代のヤマト王権との強い結びつき、古代の貨幣「和同開珎」の铸造に代表される最先端産業の発展、中世における畿内・西国の霸者大内氏の華麗な文化など豊かな歴史が数多く残されています。本特別展では半世紀にわたる県内の発掘成果を紹介し、交流・産業・政治の視点から本県の魅力を県内外に広く発信したいと考えています。

天文の各展示室
が連なり、3階
には子どもたち
に大人気の体験
学習コーナーや
山口線運転シ
ミュレータがあ
ります。当館で
は実物の展示を
重視しています



地学展示室のティラノサウルス化石標本（レプリカ）

博物館の出前授業で、

障害のある児童生徒に新たな学びの機会を



はじめに

私は、令和4年度に長期研修教員として山口県立山口博物館で研修をさせていただきました。山口博物館では、ミュージアムティーチャーとして、主に社会見学や出前授業などを担当し、年齢も居住地域も異なる県内のさまざまな子どもたちと関わる機会をいただきました。その中で、私は「総合支援学校との連携」を研修テーマに掲げ、知的障害のある児童生徒への出前授業を中心に取組を行いました。

山口博物館の出前授業について

山口博物館の出前授業は、博物館が扱う各分野（天文、地学、植物、動物、考古、歴史、理工）から精選された10以上の体験的な学習プログラムが用意されています。学習プログラムの内容の多くは、小学校の学習内容に沿つたものになっていますが、「教科学習」を目的とする以外にも利用することができ、学習内容の難易度も、参加する子どもたちの実態に応じて多少変更することもできます。そのため、知的障害のある児童生徒においても「教科学習」はもちろん、生活の充実のために重要な「余暇の幅を広げる」「社会とつながる楽しさを感じる」など、さまざまな目的で利用することができ、学校生活だけでは学ぶことができない新たな良い学びの機会をつくることができると思いました。

総合支援学校で実施した出前授業について

昨年度は、県内の総合支援学校のご協力をいただき、

山口県立防府総合支援学校 中学部

教諭 惣 田 亘 代

多くの学校で出前授業を実施しました。実施した児童生徒は、小学部、中学部、高等部と、生活年齢も障害の実態もさまざまです。学校からの依頼が多くた学習プログラムは、理工分野の「ドローンプログラミング」や「ロボットプログラミング」などのプログラミング学習、考古分野の「埴輪づくり」でした。児童生徒の多くは、「埴輪のレプリカ」や「ドローン」「mBot」などのはじめて触れる教材に興味・関心を示し、大変意欲的に学習に取り組むことができました。「埴輪づくり」では、思い思いの埴輪を作製するだけでなく、「埴輪のレプリカ」に触って感触や構造を確かめたり、何を模した埴輪かを当てるクイズに楽しそうに挑戦したりする姿も見られました。プログラミング学習では、自分がプログラミングした通りにロボットやドローン

に挑戦する「歴史の授業」でした。また、このオンライン授業を通じて、児童生徒が日頃関わる機会が少ないのであろう学芸員や、複数の総合支援学校中学部の生徒同士が関わる機会もつくることができました。

おわりに

昨年度は、博物館職員として、出前授業を通じて、さまざまな児童生徒が意欲的かつ楽しそうに活動に取り組む姿を見るることができました。また、博物館という、人的資源・物的資源が豊富な場所で、各分野の学芸員から専門的な話を伺う機会も多く、自身の知識や技能を向上させることができました。その他にも多くの博物館業務に従事させていただき、貴重な体験となりました。今後は、研修で得たことを生かし総合支援学校教員として、博物館とのさらなる連携を推進する取組をしていきたいと思います。

オンライン授業について

新型コロナウイルス感染症対策をはじめ、さまざま



オンライン授業（館内見学）の様子

も、博物館の素晴しさや楽しさを感じてもらいたいと思

い、博物館と総合支援学校を繋いで、オンライン授業を実施しました。授業内容は、クイズに挑戦しながら館内を見学する

「館内見学」や歴史分野の学芸員による展示解説やクイズ



新しく聞く・再び聞く

地域に学び

人に学び

つながりに学ぶ



周防大島町立東和小学校

校長 答 口 由美子

周防大島町の東部に位置する本校は、南に白木山、西に嵩山を望み、北には国道437号を隔てて広がる穏やかな内海。オレンジロードの向こうからやわらかな朝日が差し、子どもたちの元気ないさつが響きます。

令和5年4月、周防大島町立東和小学校が開校しました。周防大島の東和地区には、かつては九つの小学校がありましたが、統合・再編を繰り返し、地区唯一の小学校として、旧東和中学校の先輩方が学んでいたこの場所で、新たな一步を踏み出しました。児童数は79名。その素直な心や学びへの意欲、「ここぞ」という時のパワーと団結力は、温かいつながりの中で育まれ受け継がれてきたものであることを感じます。

多くの保護者・地域の方々が子どもたちの成長に心を寄せ、朝の見守りをはじめさまざまな教育活動を力強く支えてくださっています。そこで、「ふるさとを愛し、心豊かで主体的に生きぬく『東和っ子』の育成」を学校教育目標に掲げる本校では、地域全体を学びの場とし、「人



地域の方による見守り

生を中心に学芸員の方の指導のもと宮本先生の「あるく・みる・きく」という手法で学び、地域の移り変わることについて調べることを通して昔の暮らしや文化への関心を高めています。5・6年生は、この手法を生かして地域で再発見・新発見したことを発信していくことを計画しています。

体験活動を通して学ぶ



田植え体験

環境学習の一環として、サツマイモ(東和金時)やミニカボチャの栽培、グリーンカーテン作り、

米作り等に各学年で取り組んでいます。5年生は6月中旬に地域の方の水田をお借りして田植えを行いました。

主食である米やその育ちへの関心を高めるとともに、田植えを行うまでの準備やその後の管理などを収穫までには長い時間と大変な努力が必要であること等について理解を深めてほしいと願っています。

生け花体験には全学年で取り組んでいます。「生きている植物にふれ、命の重みを実感する」「日本の歴史や文化を味わい楽しむ」「思いやり、自然を愛てる心や環境保護への意識を高める」ことを目的としています。子どもたちは、植物と向き合い、それぞれの感性を生かして自由な発想で伸び伸びと生けています。

民俗学者「宮本常一」に学ぶ

校区には、「宮本常一記念館」があります。3、4年

5・6年生を中心に旧和田小学校から受け継いだ「陸奥太鼓」に取り組んでいます。和太鼓の響きを体感するとともに日本の伝統文化のよさを味わい、また、伝承のことの大切さについても考えを深めてほしいと思います。

いくつかの体験活動について述べましたが、これらの全ての体験の指導者は保護者・地域の方々です。子どもたちは、体験そのものの楽しさや喜びとともに、教えてくださる方々のお人柄の温かさを感じながら安心して学び、地域への愛着、地域の方々への感謝や敬愛の気持ちにもつながっています。また、私たち教職員も生き方について大いに学ばせていただいています。

山口県立周防大島高等学校の生徒の皆さんから子どもたちが、自然環境の保護や福祉について教えてもらうという計画を進めています。年齢的にも近く、より親近感をもって学ぶことができ、また、高校生の皆さんの熱心に学ぶ姿が学び方の手本となり、目標としての存在となることと思います。

校種間連携を通して学ぶ

各学年で「よりよい地域づくりのために」をテーマに、課題解決に向けてアイデアを出し合い、海岸ごみ拾いや地域のよさの発信等みんなで協力して取り組んでいます。そうした取組を通して、粘り強さや思いやりの心、マネジメント能力を育てていきたいと考えています。また、人の役に立つことの喜びを味わい、自信や夢、志に繋げていけるよう支援してまいります。

「ハワイ移民の島」「みかんの島」として知られる周防大島町。先人の足跡をたどると、あらゆる困難に屈せず、夢をもって未知の土地で生活を切り拓くたくましさ、フロンティア精神に満ちた姿、島の経済的自立を求めて田畠転換し、ミカン栽培へと大きく舵を切った進取の精神あふれる姿に多くのことを学ぶことができます。周防大島の歴史を刻み、守り育てて来られた全ての方への感謝とともに、その志や心意気を伝えつづ「ふるさとを愛する子ども」「未来を拓く子ども」の育成に努めています。

一つ目の「あい」は地域とのふれあいです。本校は全校児童1名ですが、4月に「1年生を迎える会」をしました。島内放送で参加を呼びかけたところ、25名もの地域の方にお越しいただき、みんなで集団ゲームをして楽しい時間を過ごしました。先日の地域参観日では、地域の方と一緒に体力テストをしました。1年生が長座体前屈のやり方を一生懸命説明しました。「子どもは地域の宝」という言葉を聞きますが、「子ども(学校)にとって地域は宝」だと強く感じています。

平郡東小学校は、この春、新1年生1名を迎えて、4年ぶりに開校しました。開校式・入学式には50名もの地域の方が来られ、新しいスタートを祝つていただきました。

開校にあたり、今年度の学校教育目標を「ふるさとを愛し、心豊かに、学びを楽しむ平郡つ子の育成」としました。実現に向けたキーワードは、「あいがいっぽい」です。

平群島は柳井市の南にある、県内で二番目に大きい島です。柳井港一平郡東港間は1時間40分かかりますが、船からの景色は最高で、運が良ければスナメリに出会うこともあります。



あいがいっぱいの学校生活に

柳井市立平郡東小学校

校長 下瀨 正文



—新しく聞く・再び聞く—

蓋井小中学校
下関市立蓋井

(市立蓋井中学校)
校長 藤井 潔

組んでいます。

卷之三

下関市吉見地区から北西に13キロ離れた響灘に位置し、磯は恵みが多く山林は緑豊かな蓋井島。強風が吹きつけ海が時化することも多い自然環境下の人口約90人の島に本校があります。

組んでいます。これまでの蓋井教育の基盤「ふるさと蓋井島」で生きがいを求める、豊かに生き抜いていく力の育成」は、小中一貫校でも継承し、そのために、9年間の連続した学びや日々の小中

A group of people, including children and adults, gathered in a gymnasium for a welcome meeting for first-year students. They are wearing face masks and standing in a circle or small groups. A large black microphone stand is visible in the background.

二つ目の「あい」は友達との学び
あいです。現在、市内の複数の学校
と交流学習を進めています。オンライン
インでの交流に加え、学校を訪問し
て一緒に授業を受けることで、普段
はできない友達と話し合うという経験
をすることができています。学びの充実
だけでなく、友達の輪も広がることを願っています。また、交流学習が、平郡のことを知つてもらう
きっかけになればと考えています。
これからも、あいがいっぱいの学校生活で、児童の力を伸ばすとともに、地域を元気にしていきたいと思います。

雲寮竣工による蓋井校舎廃止から一度は途絶えた島での中学校の歴史が、今年度、下関市内2校目となる小中一貫校として再び始まりました。

中学校の0からの設立は大変で不安でしたが、開校後、学校運営が徐々に軌道に乗り、児童生徒が小中の垣根なく協力しながら笑顔で学校生活を送る姿を目にし、胸を撫で下ろしています。今年度は、「①これまでの小学校教育の質を落とさず向上させる」、「②負担なく継続でき、島に適した効果的な中学校の教育課程を築く」を関係者で共通理解して取り

地域に根ざす教育



第21回蓋井大運動会（第108回蓋井小・大運動会・第47回島民運動会）

今こそ、地域連携教育の推進を！



周南市教育委員会

指導主事 濱崎 康弘

はじめに

4月から、周南市教育委員会の指導主事として勤務する中で、私が担当する仕事の一つに「地域連携教育」があります。地域連携教育では、地域の人々が学校に出向いて授業を行ったり、学校が地域に出向いて活動を行ったりすることで、子どもたちが地域の人々と交流する機会が増え、地域の文化や歴史を学ぶことができきます。さらには、地域の人々が子どもたちと交流することで、子どもたちの学習意欲や自己肯定感が高まることが期待されています。実際、私は前任校の周南市立徳山小学校で、授業を通じた取組の中で、子どもたちの学習意欲や自己肯定感が高まることを実感することができました。そこで、私の取組を二つの視点から紹介します。

学校運営協議会の在り方

地域連携教育では、学校・家庭・地域が情報を共有・交換したり、目標や課題、取組について協議したりする場として、学校運営協議会があります。ここでは、次の三つのことを大切にしています。

①めざす子どもの姿の共有

子どもたちに身に付けさせたい力や、めざす子どもたちの姿を共有することで、学校・家庭・地域が同じ方向に向かって取り組むことが大切です。

②学校・地域連携カリキュラムや年間カリキュラムの整理

ゴールの姿に辿り着くまでの、各教科や単元ごとの繋がりを明確にします。そうすることで、子どもたち



日々の授業改善

徳山小学校では、地域連携教育を授業づくりのレベルで推進しています。ここからは、実際に私が5年生で行った授業づくりを紹介します。

教科書に載つている課題が、自分の身の周りでも起きていることを知つてもらいたいと思い、周南漁業協同組合の方と協力をしました。取材の中で教えていただいた旬の食材や特産品を子どもたちに伝えることで、生活との繋がりを感じることができます。

ちに関わる人々が、教科や単元で、どんな力を解することができます。意図をもつて授業に関わることがであります。

子どもたちの力を高めるために、どのように地域の方に関わっていただきたい、地域にある資源を活用したりすると効果的であるか話し合った上で、活用したい地域のひと・もの・ことについて、委員のみなさんから情報を提供してもらいます。その情報を基に、授業づくりを進めていく

以上のような二つのことを柱として、私は地域連携教育を進めてきました。自分の取組を振り返ると、取組方法は多岐にわたっており、地域連携教育に正解はないと言っています。だからこそ、自分たちの取組をPDCAサイクルで回していくことが重要です。地域連携教育の主役である子どもたちの言葉や姿を通して、自分たちの取組を振り返り、改善していくことが、今後の地域連携教育のさらなる推進に繋がっていくと思います。

周南市の漁業の在り方について、意欲的に発表する子どもたち



地域とともに伊佐を愛する

子どもたちを育成するために



美祢市立伊佐中学校

教諭 丸谷友克

はじめに

本校がある伊佐地区は、昔から石灰岩を採掘・加工する鉱工業がさかんでした。また火山の噴火活動により形成された桜山には、古刹の南原寺があり、修驗道の修行場として発展しました。その南原寺に由来するのが伊佐の薬売です。このように、古くから産業が発展した伊佐地区ですが、近年は過疎化と少子高齢化が進み、今年度の生徒数は32名となっています。そのため、多様な他者と関わることが難しいという課題があります。そこで、昨年度より伊佐中学校（分離型小中一貫教育）となつた際に、めざす15歳の子どもの姿を、「伊佐を愛し、夢や目標の実現にむかつて、自ら学び、心豊かに、たくましく生きる子ども」として、「誇り、挑戦、共みがき」を学校教育目標として教育活動に取り組んでいくことになりました。これから、本校の地域と連携した取り組みを紹介します。

伊佐小中学校マスクコットキャラクター「いさゆめちゃん」

小中一貫校になつたのを機に、伊佐小中学校マスクコットキャラクターをつくることにしました。

そこで、全校児



伊佐小中学校マスクコットキャラクター
「いさゆめちゃん」

童生徒からアイディアを募集し、投票で決まった原画を、本校出身で東京在住の漫画家、苑場凌さんが手塩に掛けられて、「いさゆめちゃん」が完成しました。それ以降、苑場さんに、伊佐の歴史についての講演や「いさゆめちゃん」の描き方講座を開催していただいています。「いさゆめちゃん」は、行事や小中学校のWE Bページ、学校だよりとさまざまな場所に登場しており、今や伊佐中学校と地域をつなぐ架け橋になりました。

地域の方から学ぶ職業講話の実施

本校では、職場体験学習の事前学習として、職業講話を実施しています。そこで、地元で活躍されている2名の卒業生にお願いしました。一人目は、警察官を退職後に伊佐地区に帰つてこられた、警備保障会社を立ち上げて経営している卒業生です。社員のために作つた食堂を一般の人も使えるようになど、地域のために尽力されています。二人目は二代にわたつて牧場を経営している卒業生です。牛を飼育する牧場と地産地消レストランの経営だけでなく、自家製の発酵飼料や堆肥の生産販売と、「喜ばれる命のつなぎ方」とSDGsの視点から畜産の仕事に取り組まれています。2名の方から、地域への思いや地域貢献の大切さを学びました。

生徒の地域への思いを表現した「いさゆめちゃんまつり」

生徒総会にむけての話し合いの中で、美祢市最大の夏祭り「十七夜」に参加して伊佐地区を盛り上げたいことを育成していきたいと思います。

この他にも、立志式で桜山を保護者や地域の方と登山したり、総合的な学習の時間の総仕上げとして「SDGsの視点から地域の将来を考える学習」に取り組んだりと、地域のヒト、モノ、コトを活用した地域とともに学び、育つ学習に取り組んでいます。昨年度、市教委の地域連携教育に関するアンケートの質問項目「あなたは大人になつても今住んでいる地域に住みたいですか」で100%の生徒が肯定的に答えていました。これは、伊佐に残つて活躍される方、伊佐に帰つてきて新たな取組をされる方、伊佐を離れてからも伊佐のために行動される方と、多くの地域の方に支えられていることを肌で感じて学べているからだと確信しています。これからも、学校運営協議会や協育ネットを中心に地域と連携しながら、伊佐を愛する子どもたちを育成していきたいと思います。



2022.7.19 いさゆめちゃんまつり

コミュニティセンター・公民館の取組（公民館報表彰館）

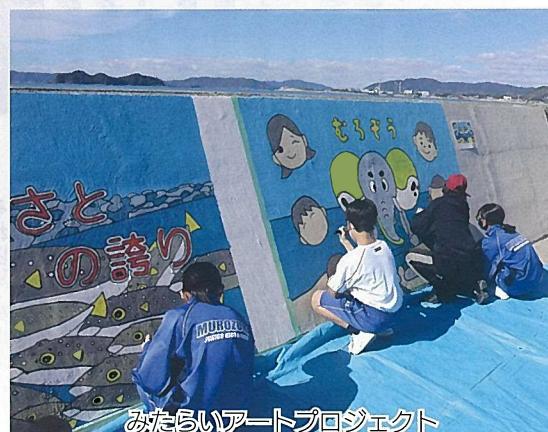


子どもの成長が地域を育てる

光市立室積コミュニティセンター
(室積まちぐるみ協議会 会長)

館長 松本 隆

隆



私たちの役割とは



長門市 傑山公民館
館長 中原 純二

「クリーン光大作戦が終わつたな。来月は夏祭り、盆踊り大会だ！」と、本館では未就学児童から高齢者まで顔を合わせる行事が、毎月のように行われています。

子どもたちが参加する行事も数多く開催しています。定期船がでている牛島に渡つての探訪や山道を16キロ歩き、自然の豊かさを感じるウォークラリーでは、笑顔いっぱいの子どもたちが、楽しみながら地域のことを学んでいます。

私たちの地域では、平成25年に中学校で、26年に小学校で学校運営協議会が発足しました。地域・学校・保護者の代表が話し合い、3者が一緒に子どもたちを育んでいます。運営協議会のカリキュラムに地域行事として行わっていた、しめ縄作りや門松作りを組み込み、子どもたちの学びや育ちを地域ぐるみで進めています。

コロナ禍でも地域のつながりや子どもの学び、育ちを止めてはいけないと話合いを重ねました。そして、コロナウイルス感染症対策を講じた上で、どんどん焼きやハロウイン仮装スタンプラリーなどの新たな事業を実施しました。

昨年度は、防潮堤にペインティングする「みたらいアートプロジェクト」を実施しました。デザインには、中

学生が考案した地域キャラクター「むろぞう」と地域の自然の豊かさを象徴するクサフグの産卵風景を子どもたちや地域の人たちが描きました。このように、室積まちぐるみ協議会は力強い地域力で日々活動しています。

これらの活動により「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」が図られているとして、室積学園学校運営協議会とともに文部科学省表彰を受賞いたしました。

今回の受賞を励みに、これからも地域が子どもたちとともに成長できるよう、創意と工夫をもつて地域活動に取り組んでいきたいと思います。

当館は、平成20年10月、山口県初の公民館の指定管理者を傑山地区発展促進協議会が受け、現在に至る。地域内ではまた、NPO法人ゆうゆうグリーン傑山が、ラグビー場など施設の指定管理、デイサービスやデマンド交通の業務委託を受けている。高齢化の進む地域であるが、私たちは常になすべきことは何かを考え行動している。そのため、自分たちは主体的に種々の活動に取り組むことができていると自負している。

傑山では、学社融合の合同体育祭や文化産業祭、各種スポーツ大会などを開催している。コロナ禍で実施困難な数年間ではあったが。

私たちが特に力を入れている業務に地域密着型広報「たわらやま村民塾」の発行がある。この広報紙名は、指定管理を受けた公民館の別称でもある。月2回開催する編集会議では、よりよい紙面となるよう徹底的に内容を委員が意見し合う。紙面を彩る記事は、地区内のさまざまな出来事や行事、地域から提供された情報などである。小学生が考案した地元オリジナルキャラクター「さるビー」と「ゆずきつちやん」の動きのあるイラストを地元得意な方がさまざまに描き、紙面各所に盛り込む。お

かげさまで、12年連続県館報コンクールでの各賞受賞、令和2年度には全国コンクールで金賞を頂戴した。

また、手作りカレンダー発行やスマホ教室の開催、一位ヶ岳の新春登山なども行っている。加えて、地元の財産である「傑山しゃくなげ園」の草刈り等の作業も行い、景観の整備に努めている。

今、なすべきことは何かを考えみると、未来は拓けていくようである。公民館活動がより充実し、地元の方々がさらに新たな夢や希望をもち続けることができるようしっかりと取り組んでいきたいと思ふ。

